

シン読解力

2025.3.14

「シン読解力」そんな言葉があるのか。ここ数年だろうか。映画の世界などでは、“シン”が流行っている。教育の世界、読解力にも、シンが出てきた。

読解力と言われて、どんな力を思い描くだろうか。文章を正しく読む力だろうか。国際的な学力調査における日本の子どもたちの読解力低下の問題から「PISA型読解力」という言葉が出てきた。「論理的読解力」や「情緒的読解力」という言葉もある。評論や論説などの説明的文章と小説や物語などの文学的文章では、読み方が違う。

全国的な調査により、日本の子どもたちの約半数が、教科書を読めてはいないことが明らかとなつた。音読はできいても、意味を理解してはいない実態が浮き彫りとなつた。読解力というと、本を読めばいい、読書量が大切という話になりがちである。否定はしないが、それだけではないことも事実である。

各教科の教科書を読み解けるような読解力を身に付けるには、読書では不十分である。場合によつては、読書で身に付けた自己流の読みが、一部の教科の読解を阻害することさえある。人生で困らない程度の読み書きを身に付けるには、自由に読むよりもある種の型を意識するトレーニングが有効である。

一般的にイメージされている読解力とは明確に区別するために、教科書を読み解くために必要な読解力のことが「シン読解力」と名付けられた。教科書が読めない、誰でも読めばわかるはずの文章が読めないのはなぜか。その原因は、シン読解力にある。残念ながら、シン読解力は学力との強い相関関係がある。シン読解力で進学できる高校が決まってしまう現実がある。資格試験などの合格を左右する現実がある。

では、学校では、国語の授業では、シン読解力を育成してこなかったのか。シン読解力を養う教育手法は、これまで欠落していたというのが実際のところである。なぜそうなってしまったのか。学校の先生が、シン読解力のことを意識してこなかったからである。

子どもたちは、やがて成長し、社会に出て活躍するようになる。ビジネス文書や公的な文書、マニュアルや説明書の類を読むようになる。そのとき、正しく意味を理解できなければどうなるか。きっと、困るだろう。仕事に支障をきたすことだろう。そのためにも、シン読解力を身に付けなければならない。シン読解力とは、才能や感性ではない。トレーニングによって身に付けることができるスキルである。ここ数年、取り組んできたことに、「シン読解力」という名前が付いた。これからは、この用語を使っていこうと思う。